

## 保育者イメージと自己イメージの調査 その3

——保育科学生におけるライフスタイルの変化 III——

天 野 珠 子

Life-styles of Preschool Education Department Students at Komazawa Women's Junior College/III:

Their images of Themselves and of Preschool Teachers/No. 3

Tamako AMANO

### I はじめに

共同研究も3年目を迎え、本研究においても当初のねらいであった入学直後に調査した学生の卒業期における意識変化の第一回調査をやっと実施することができた。この3年間の社会情勢は、大きく変化しバブルの崩壊による不況、それに伴う就職難を迎えている。

この共同研究は、それぞれが単に個人の専門的研究という動機で始めたものではない。周知のように文部省、厚生省など国をあげての教育改革の一つとして、保育内容の見直しが図られたことに伴い保育者養成校教員として、より質の高い保育者養成を目的とし、そのため個々の学生の心身の健康チェックと保育および自己自身に対する意識変化を探ることにより学生への理解を深め、またきめ細かな指導と養成ができるように複数の教員により行なわれているものである。

本研究の分担は、在学中における学生の意識変化である。今回の調査の主目的はまず第一には、保育職についての意識が、一般的・漠然的な入学時と専門的知識の把握と実習などを通しての現実を知ることによりどのように変化するのか、またそれにより保育職離れの起こり得る率は高いのかを調査することであった。二番目には二年間の学生生活により自己自身のイメージにも変化があるかどうか探ることであった。青年期後期に該当する学生達の2年間のアイデンティティは成人のそれに比較してかなり流動性が見られると思われる。理想と現実のギャップも大きく、将来についても悩み迷う時期といえる。

第三には、同じ学生の中でも特に保育科を志望する学生の傾向は他の専門分野に進んだ学生とは異なった共通性があるのだろうか。保育者が幼児や障害者と関わる時、相手の個性を尊重し同じ人として認めあい、触れ合うことが必要である。我々保育者の養成を手掛ける教員にも同じことが言える。単に専門的知識を伝えるのみの学生との関わりでは、保育・教育に重要な信頼関係は生じにくい。学ぶことの意味を見いだせない学生に人を導くことが出来るであろうか。

保育者養成に携わる教員それぞれは、間接的に幼児や障害者と触れ合うことである。ひとりひとりの学生が関わるであろう何十人、何百人のそれらの人々のためにも、保育職に価値を発見し情熱を持って関われる保育者を養成しなければならないであろう。

本研究はそれを願い学生生活の中で変化していく学生意識を探り教授法に反映させていきたい。

### II 目的

1. 入学時における保育者イメージと自己イメージの年次的変化(平成4・5・6年)を探る。
2. 平成4年度(1992年度)入学生の入学時と卒業時の保育者イメージと自己イメージの変化を探る。
3. 本学他科の学生と保育科の学生の保育者イメージと自己イメージを比較して保育科学生に共通する特殊性を探る。

### Ⅲ 方法

#### 1. 対象

- (1) 平成4・5・6年にそれぞれ入学した保育科学生（年次的変化の調査）

※カッコ内の％は各学科の在籍者数からの比（留年生は除く）

サンプル総数 440

内訳 平成4年度……180（95.7％）

平成5年度……122（96.8％）

平成6年度……138（97.9％）

註…平成4年度までは定員150名、平成5年度以降は定員100名となったため総数が異なっている。

- (2) 平成4年度保育科入学生の入学時と卒業時（同一学生の調査）

サンプル総数 365

内訳 平成4年5月…180（95.7％）

平成6年1月…185（99.5％）

- (3) 平成6年駒沢女子短期大学、同女子大学入学生（保育科学生との比較調査）

サンプル総数 458

内訳 短大保育科 ……………139(97.9%)

生活科……………92(42.3%)

英語英文科 ……………129(52.8%)

大学(日本・国際両科) ……99(47.4%)

#### 2. 時期

対象1について 平成4、5、6年の入学時（4月下旬～5月上旬）

対象2について 平成4年4月と平成6年1月

対象3について 平成6年5月

#### 3. 方法

アンケート調査（いずれも講義時間に実施）

#### 4. 内容

形容詞対語による保育者イメージと自己イメージの意識調査（本学紀要26号、27号参照）

### Ⅳ 結果と考察

- 1 入学時における保育者イメージと自己イメージの年次的変化

- (1) 平成6年度入学生の保育者イメージと自己のイメージ比較（図1）

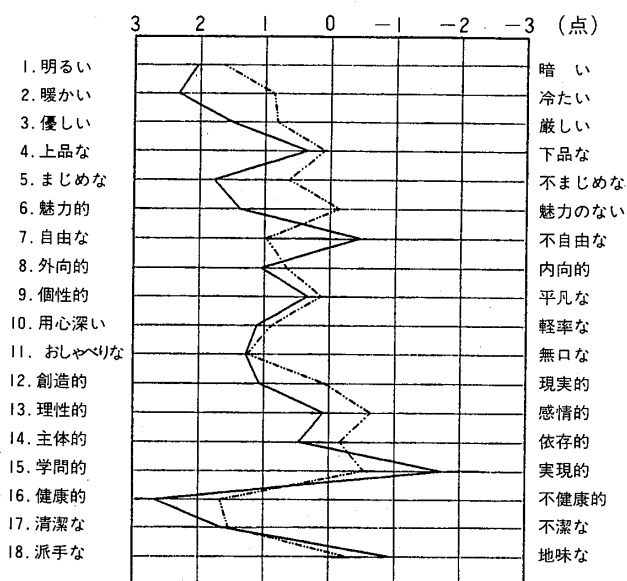
今年度入学生の保育者イメージと自己イメージの比較は過去2年間で大差ないが、その中でも昨年の入学生との共通性が多い。特に「学問的・実践的」の項目では平成4年度生に比較して平成5、6年度生は両者の差が開いている。保育科定員数の減少に伴う受験の厳しさが反映しているのであろうか。

今年度両者の差が1ポイント以上開いた項目は下記の通りであった。

・自己イメージより保育者イメージの方が強い項目

「暖かい」「真面目」「魅力的」「健康的」「実践的」「創造的」

図1 イメージ比較 ——— 保育者イメージ  
————— 自己イメージ



※平成6年5月調査  
(平成6年度入学生／保育科)

- ・保育者イメージより自己イメージの方が強い項目  
「自由な」

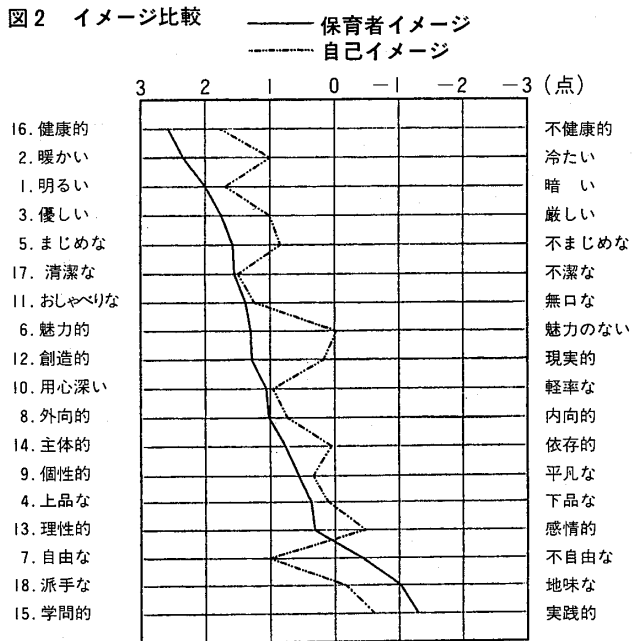
## (2) 3年間の平均の比較 (図2)

ここでは3年分の比較を保育者イメージのプラスポイント順に配列して傾向を探ることとする。

この図で保育者イメージの強いものは①「健康的」②「暖かい」③「明るい」④「優しい」⑤「真面目な」である。またマイナスポイントは強い順に①「実践的」②「地味な」③「不自由な」となる。これが入学直後の学生の代表的保育者イメージであろう。

自己イメージについては、マイナスポイントの3項目以外は全て保育者イメージより低くなっている。特に「魅力的」「暖かい」の差の開きが目立つ。

図2 イメージ比較



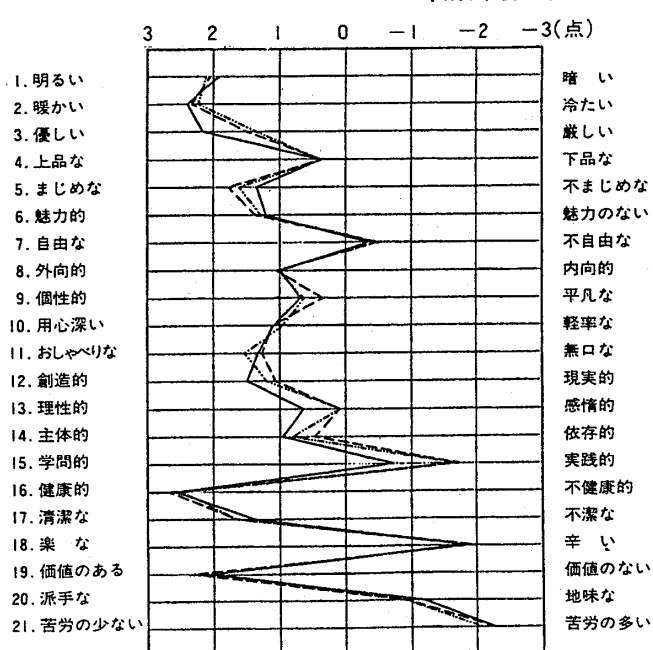
※H4～6年度保育科入学生平均

## (3) 保育者イメージの年次的変化 (図3)

3年間の保育者イメージのプロフィールは良く似ている。1ポイント近く差の出た項目は先に述べた「実践的」のみである。

3年とも2ポイント以上高く評価した項目で、保育者イメージをつくってみると、保育者は「暖かい」「健康的」「価値のある」「苦勞の多い」となる。

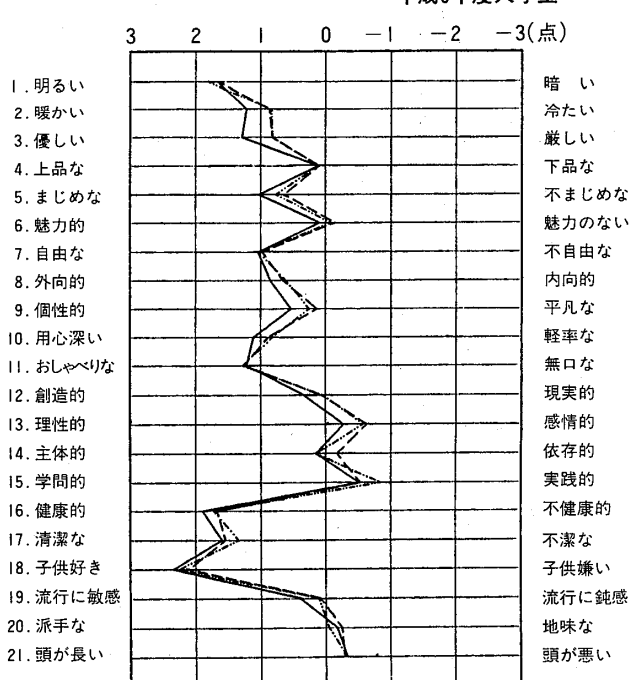
図3 保育者イメージ〔時系列〕



## (4) 自己イメージの年次的変化 (図4)

図のごとく本学保育科に入学する学生の自己イメージは保育者イメージ以上に共通している。1ポイント以上の差が出た項目はない。強いポイントの順位では、一位「子ども好き」二位「健康的」三位「明るい」四位「おしゃべりな」となった。

図4 自己イメージ〔時系列〕



## 2. 入学時と卒業時の意識変化

先にも述べたように、今回ようやくこの調査が可能となった。両結果の比較のため入学時の

表1

保育者イメージ（平均値） 平成4年4月入学生

(サンプル数)	H4、5月 (180)	H6、1月 (185)
明るいー暗い	1.91	※※⊕ 2.18
暖かいー冷たい	2.40	※※※⊖ 1.98
優しいー厳しい	2.16	※※※⊖ 1.15
上品なー下品な	0.37	0.38
真面目なー不真面目な	1.36	※⊕ 1.58
魅力的ー魅力のない	1.22	1.44
自由なー不自由な	-0.34	-0.21
外向的ー内向的	0.99	1.23
個性的ー平凡な	0.68	0.90
用心深いー軽率な	1.10	1.16
おしゃべりなー無口な	1.34	1.53
創造的ー現実的	1.50	1.60
理性的ー感情的	0.63	※※⊖ 0.28
主体的ー依存的	0.96	0.76
学問的ー実践的	-0.73	※※※⊕ -1.55
健康的ー不健康的	2.58	2.51
清潔なー不潔な	1.39	1.55
楽なー辛い	-1.81	-1.81
価値のあるー価値のない	2.04	※※⊕ 2.32
派手なー地味な	-1.18	※※⊖ -0.86
苦勞の少ないー苦勞の多い	-2.28	-2.20

(※※※ P<0.001) (※※ P<0.01) (※ P<0.05)

(⊕…強まった項目) (⊖…弱まった項目)

### (1) 保育者イメージについて (図5)

- ・保育者イメージが入学時より卒業時に強まったもの (P<0.05)

「実践的」「価値のある」「明るい」「真面目な」

- ・保育者イメージが入学時より卒業時に弱まったもの (P<0.05)

平均値を基準として卒業時に有意差が出たもの (危険率5%以内) からイメージ意識の変化を見ると表1、図5、図6のようになる。

自己イメージ（平均値） 平成4年4月入学生

(サンプル数)	H4、5月 (180)	H6、1月 (185)
明るいー暗い	1.66	1.64
暖かいー冷たい	1.21	※※※⊖ 0.68
優しいー厳しい	1.28	※※※⊖ 0.75
上品なー下品な	0.11	0.16
真面目なー不真面目な	1.03	※※※⊖ 0.57
魅力的ー魅力のない	0.09	0.26
自由なー不自由な	1.04	1.05
外向的ー内向的	0.86	0.74
個性的ー平凡な	0.53	※※⊖ 0.17
用心深いー軽率な	1.11	0.88
おしゃべりなー無口な	1.21	1.16
創造的ー現実的	0.33	0.16
理性的ー感情的	-0.27	※⊕ -0.63
主体的ー依存的	0.15	※⊕ -0.13
学問的ー実践的	-0.52	※⊕ -0.79
健康的ー不健康的	1.89	1.70
清潔なー不潔な	1.59	1.45
子ども好きー子ども嫌い	2.35	2.33
流行に敏感ー流行に鈍感	0.39	※⊖ 0.12
派手なー地味な	-0.18	※⊕ 0.06
頭が良いー頭が悪い	-0.33	-2.20

「暖かい」「優しい」「理性的」「地味な」

この結果を考察してみると、保育科に進学した当初の保育者イメージは幼い頃から描いてきた憧れの対象としてのイメージである。ところが2年間の専門的、実践的学習から当初抱いていた羨望的見方は消え、自分が直接関わる仕事として保育を捉え始めている様子がうかがえる。

図5 保育者イメージ〔時系列〕——平成4年度入学生／入学時  
——平成4年度入学生／卒業時

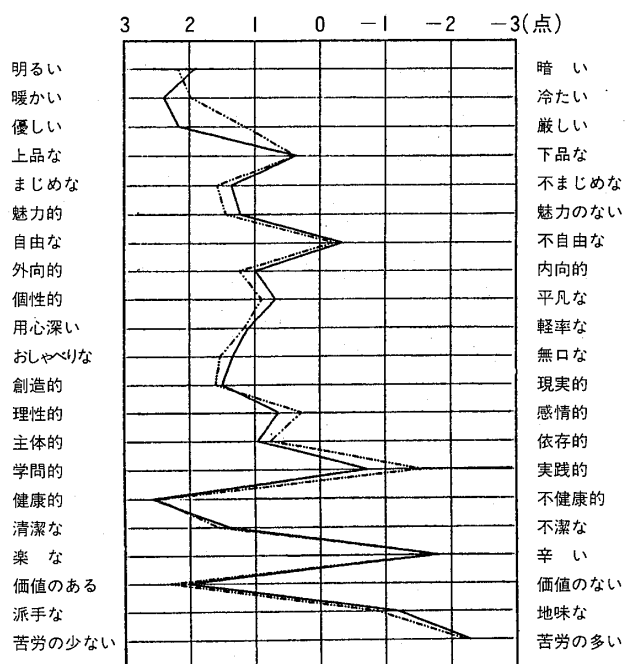
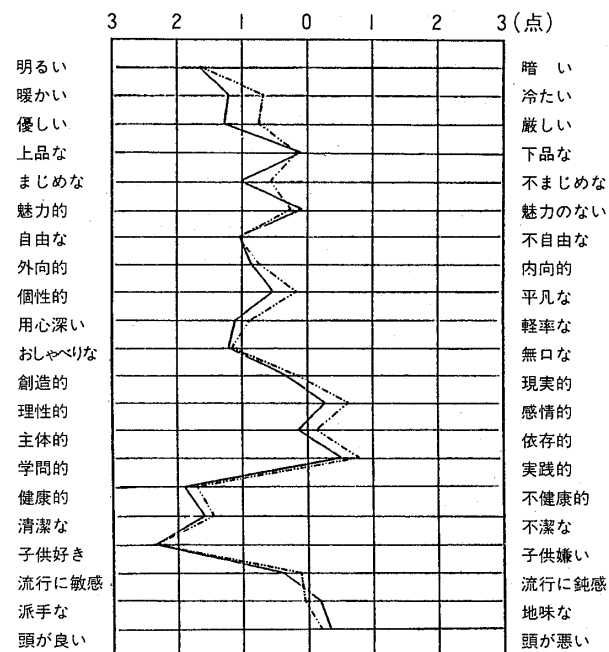


図6 自己イメージ〔時系列〕——平成4年度入学生／入学時  
——平成4年度入学生／卒業時



## (2) 自己イメージについて (図6)

- ・自己イメージが入学時より卒業時に強まったもの ( $P < 0.05$ )  
「感情的」「依存的」「実践的」「派手な」
- ・自己イメージが入学時より卒業時に弱まったもの ( $P < 0.05$ )  
「暖かい」「優しい」「真面目な」「流行に敏感」

保育者イメージと同様に「暖かい」「優しい」などの好感的情意面が減少するといった共通性が出た。そして自己の「感情的」「実践的」イメージが強まったのは、やはり実習の影響が大きいのではないだろうか。実際に保育者の姿に触れ、また自分自身が保育を経験した中で現実性を帯びたイメージに変化してきたといえよう。

「真面目な」が弱まり「派手な」が強まったことは短大生活終了時としてうなづけるが「流行に敏感」が弱まった理由はどう捉えれば良いのであろうか。高校時代の諸々の制約の中で憧れていた大人社会に自分が参加した時、あまり敏感でなくなったということだろうか。

## 3. 他科 (短大…生活科 英語英文科、大学…日本文化学科 国際文化学科) との比較

これまでの3年間、保育科学生の意識変化をさまざまな形から探ってきたのであるが、比較の場合もそれは常に保育科学生間についてのみであった。今回他科に入学した学生にも同様な調査をして入学時における両者の学生の特質を調べて見ることにした。その結果は次の通りである。

### (1) 保育者イメージについて

#### ① 保育者イメージの他科平均との比較(図7)

当然とも言えるが保育者に対する好感度は、全体的に保育科学生の方が高い。特に差の開いたものを挙げると次の通りである。

「魅力的」「外向的」「個性的」「健康的」「価値のある」「真面目な」

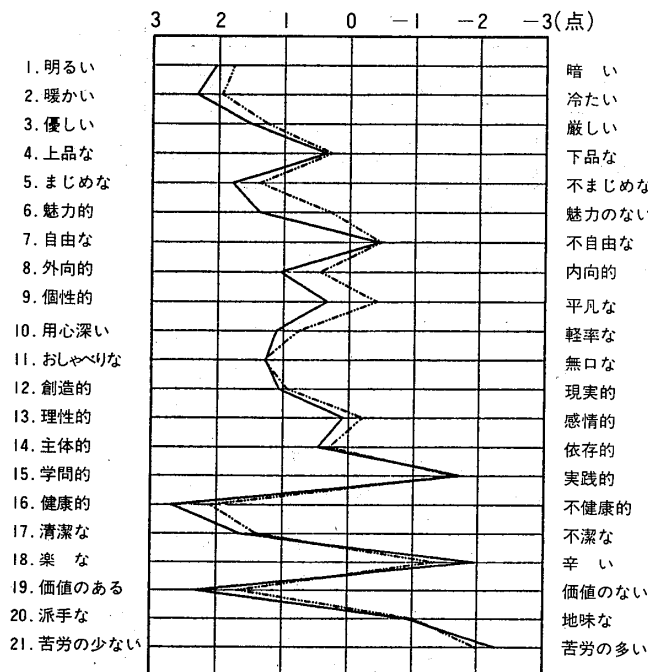
「明るい」「優しい」「理性的」「用心深い」「辛い」「苦勞の多い」

保育科・他科の間にほとんどイメージに差のないものは、次の通りである。

「上品な」「おしゃべりな」「実践的」「地味な」「不自由な」

他科の学生の方がマイナス寄りに評価したものは「魅力のない」「平凡な」「感情的」の項目であった。保育者イメージそのものの意識は共通している面が多いが、その強さにおいて他科の学生との間に差があることがわかった。

図7 保育者イメージ〔学科間比較〕 ——— 保育科  
————— 他学科



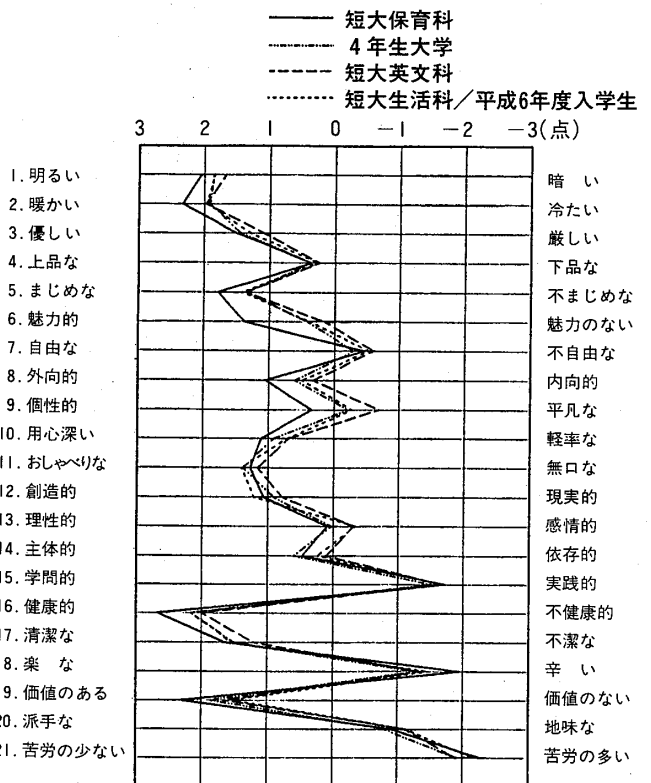
※平成6年5月調査  
(平成6年度入学生)

## ② 保育者イメージの学科間比較 (図8)

他科間の保育者イメージは、ほとんど共通している。その中でやや特徴的な科間比較をしてみると、まず短英の学生は、保育者を「平凡」とイメージする率が他より高い。また短英・短生の学生は「感情的」と捉える傾向が短保・大学より強いようである。

短英の学生は全体的に保育者イメージが他科の学生よりマイナス傾向にやや強いようである。そして大学・短英の学生は、保育者を「おしゃべり」とイメージする傾向が強い。

図8 保育者イメージ〔学科間比較〕



## (2) 自己イメージについて

### ① 自己イメージの他科平均との比較 (図9)

1ポイント以上差が開いたのは「子ども好き」のみである。しかし他科の学生も保育科学生ほどではないにせよ皆子どもは好きようである。

その他、他科の学生より保育科学生の方が自己のイメージとして多少強いものは次の通りである。

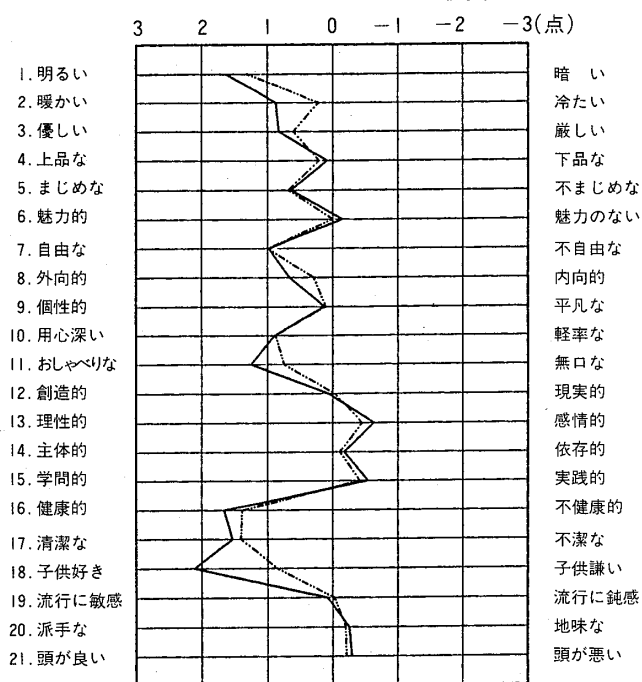
「暖かい」「おしゃべりな」「明るい」「優しい」「外向的」「健康的」

保育科学生が保育者イメージとして比較的高いポイントのものに自己イメージも他科の学生達より高いポイントになっている。

### ② 自己イメージの学科間比較 (図10)

学科間のイメージ比較では、短英の学生に「現実的」「派手な」が強く、短生の学生では「暖かい」が弱く「内向的」イメージが強い。また大

図9 自己イメージ〔学科間比較〕—— 保育科  
—— 他学科



※平成6年5月調査  
(平成6年度入学生)

学の学生は短大生より「真面目な」「用心深い」イメージが強い。

「子ども好き」が一番低いのは短英であった。

「頭が良いー悪い」の項目については、全科を通して自分は多少頭が悪いと思っているようである。

## V まとめ

今回は、前2回の調査(本学紀要26, 27号)より焦点をイメージ変化のみに絞り多方面からその変化や推移を検討した。

まず3年間の入学時の保育者・自己イメージについてであるが、全体的には共通している。しかし平成4年度生と平成5, 6年度生の意識には若干の差がみられる。平成5, 6年度生つまり現1, 2年生はかなり共通するイメージを抱いている。定員数の減少や不況などの影響を反映して、学生の層に入学動機の点で憧れよりも就職という現実を捉えての者が増加してきたのではないだろうか。共同研究IIの調査にもそのような傾向がみられるので、今後も継続して比較研究する価値があると思える。

平成4年度生の入学時と卒業時の意識変化は興味ある結果が出た。一つには保育者・自己共に「暖かい」「優しい」イメージが弱くなり「実践的」が強まったことである。更に自己に対しては「感情的」が強まり、保育者の「理性的」が弱まっている、など尊敬する保育者から職業人としての保育者像に変化してきていることである。

我々教員側としては2年間に彼女等に培いたいものは、あながちそのような傾向ではない。むしろ保育理念や専門的知識、加えてそれを基にした現場における状況判断などの力量である。これからの保育・教育は人格形成の基礎づくりとしての教師の役割が今まで以上に重視されてくる。にもかかわらず学生達は、実践的傾向(目前の繁忙さや保育のノウハウ)に目が向いてきている。

今後このような点を今一步踏み込み、入学時に憧れとした理想像の中には、やはり真の保育者に期待される面があることを気づかせていかなければならないであろう。

それにしても彼女等の行った実習園で接触した保育者の姿は忙しすぎるのであろう。健康が強さのトップに来ることはそれを裏付けているのではないだろうか。

図10 自己イメージ〔学科間比較〕

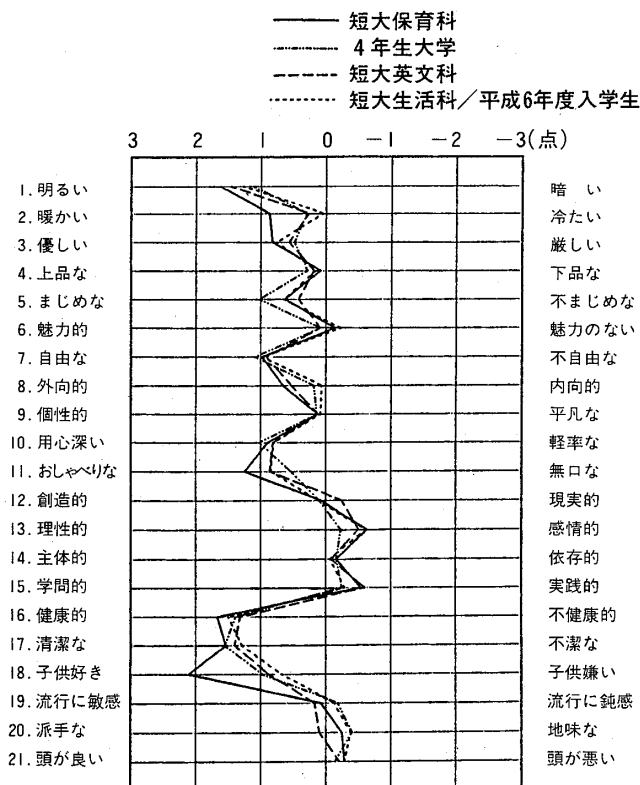
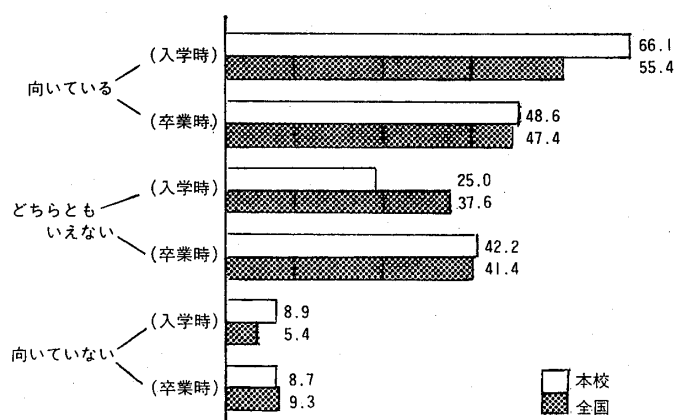


図11 保育職に対する適否 (%)



「保育職に対する適否」(図11)の入学時と卒業時の比較(詳細は共同研究Ⅱ)では入学時に自分が保育者に向いていると答えた者は66.1%(全国平均55.4%)だったものが、卒業時には48.6%(全国平均47.4%)と全国平均以上に減少している。保育職が志望時の印象よりあらゆる面でかなりハードな職種だと実感していることがうかがえる。

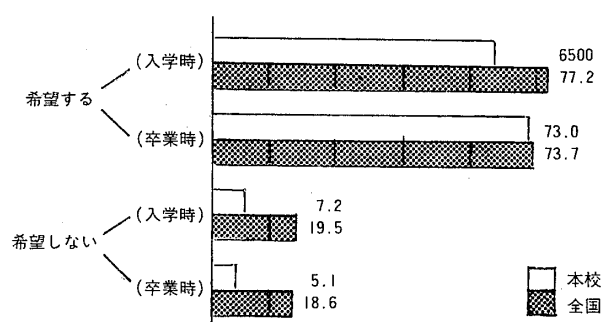
ところが「保育職希望の有無」(図12)では卒業時の方が約8%「希望する」学生が増加しているのである。(全国平均では3.5%減)

入学時より保育者イメージが強まった「実践的」「価値のある」「真面目な」などの意識と合わせて考えてみると厳しくはあってもやりがいのある仕事、と保育を捉えているといえよう。また自己イメージが強まった「感情的」「依存的」などは、「保育者に向いている」が減少し、「どちらともいえない」が増加していることに端的に表れているといえよう。本学の保育科の学生は入学時漠然としていた保育職希望が卒業時に強くなり、しかしまた保育職をそんなに甘い職業とは見ていない。その意識がこの調査の中で「価値のある」「苦勞の多い」などの項目の強さから裏付けられたといえるのではないかと。

この結果からは、我々教員側の努力がある程度効果をあげたとみてもよいと思うのである。

次に他科との比較は当然予想されたことではあるが、保育者イメージのプラスポイントは保育科学生の方が高い。反面、辛くて苦勞の多いというマイナスポイントも保育科学生の方が強いのである。保育科は幼免、保母資格という二つの資格取得が可能な科である。卒業後の進路も保育職を目指すという目

図12 保育職希望の有無 (%)



標が明確なため、ある程度当初より覚悟しているといえよう。

## Ⅶ おわりに

このイメージ調査はあくまでも本人の主観によるものでありまたそれぞれの平均を基準としている。学生意識の概要は把握出来ても、個々の学生の指導の目安でしかない。現に今年に入ってからすでに、短大生活や講義内容に自己の理想とのギャップを感じて退学したり休学したものが少数ではあるが出ている。今後このようなカウンセリングや実習時のアドバイスの参考にも、他の共同研究と合わせて活かしていきたいと思っている。

## Ⅶ 引用・参考文献

- 1) 日本私立短期大学協会保育科学研究委員会「保育系短大学生意識調査報告書」1994
- 2) 天野珠子「保育者イメージと自己イメージの調査(保育科学生のライフスタイルの変化)」駒沢女子短期大学研究紀要 第26号 1993
- 3) 天野珠子「保育者イメージと自己イメージの調査・その2(保育科学生のライフスタイルの変化)」駒沢女子短期大学研究紀要 第27号 1994
- 4) 福川須美「意識調査から見た保育科の学生像・その3(保育科学生のライフスタイルの変化)」投稿中